

森のよりどころ

—我が国の森林資源及び里山地域の現状分析と里山と都市を紡ぐ空間の提案—



1 我が国の森林資源の現状

日本の国土面積の68%が森林で覆われている。(図1、2)

しかし、我が国林業が抱える一つの問題に、国内で使用される木材の多くを輸入材に頼り、国内森林資源を放置し、荒廃させていることが挙げられる。この一つの原因は、国産材の流通にその一因があるといわれている。

国産材の流通は、森林所有者が零細で、生産・流通・加工の各段階が小規模、分散、多段階である為、品質・性能の確かな資材を低コストで安定的に供給する体制が確立されていない状況にある。その為いくらか政府が国産材利用の拡大に向けた取り組みとして、各方面での木材利用の推進や、木材加工施設の整備を行ったとしても、根本的な解決には至っていないのが現状である。

しかし果たして流通システムの改善だけに林業の活性化を任せきりしてよいのだろうか。私はそれと同時に、林業の置かれた状況を把握しない多くの国民に、少しでも我が国の林業が置かれた状況を理解してもらう必要があると考える。

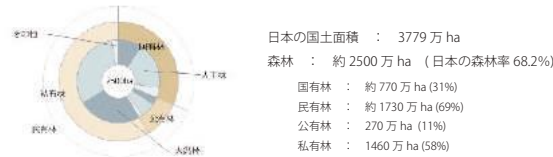


図1 日本の森林資源の面積割合
林野庁 | IP 平成 24 年度森林・林業白書より

日本の国土面積 : 3779 万 ha
森林 : 約 2500 万 ha (日本の森林率 68.2%)
国産材 : 約 770 万 ha (31%)
輸入材 : 約 1730 万 ha (69%)
公有林 : 270 万 ha (11%)
私有林 : 1460 万 ha (58%)

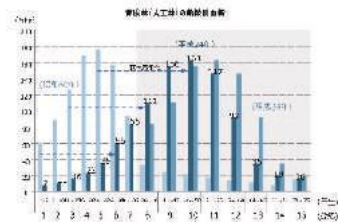


図2 育成林の齢級別面積

2 我が国の里山の現状

日本では、かつて田んぼや草地、雑木林などの植生をただ自然任せに遷移させずに人間と共生しやすい状態に維持する「里山」地域が存在した(図3)。

しかし、第二次世界大戦後エネルギー源と農業形態が変化し里山地域が衰退する(図4)と同時に、時代の流れとともに都市は拡大や縮小を繰り返し、里山では景観が崩されたのみならず、都心回帰した工場や大学のキャンパスの跡地が管理放棄され、荒廃した我が国の森林の状況の二の舞になっている(図5)。

時代による都市と里山の範囲の変化

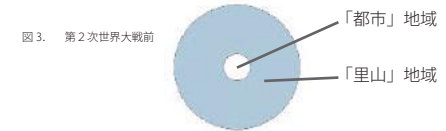


図3. 第2次世界大戦前

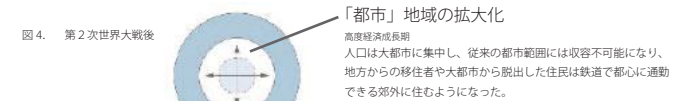


図4. 第2次世界大戦後

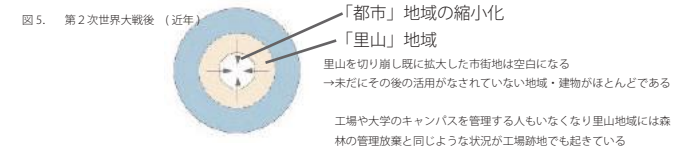


図5. 第2次世界大戦後 (近年)

工場や大学のキャンパスを管理する人もいなくなり里山地域には森林の管理放棄と同じような状況が工場跡地でも起きている

3 里山と都市を紡ぐ空間

日本の森林資源及び里山は衰退しているが、林業に興味を持ち、自然あふれる田舎地域に暮らすことを希望している人は少なくない。そこで、里山地域の工場跡地をリノベーションし、田舎生活を目的として、都心部から週末を過ごしにくる人や、定年退職し、田舎に移ってくる人のための、シェアハウス及び地域の人と関わりを持てるコミュニティ施設を計画する。



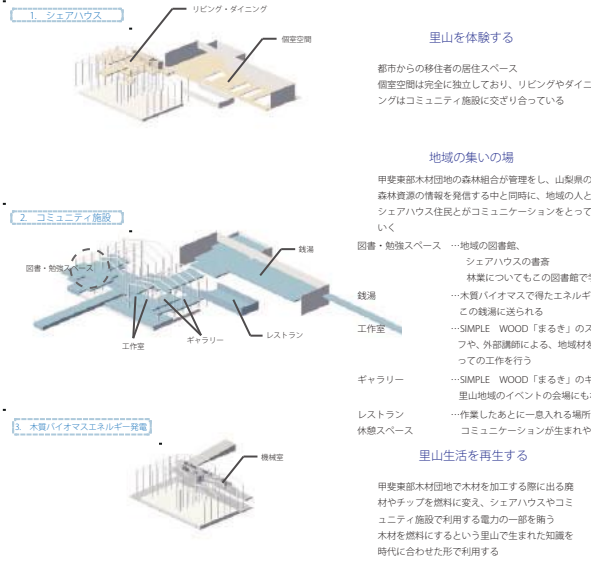
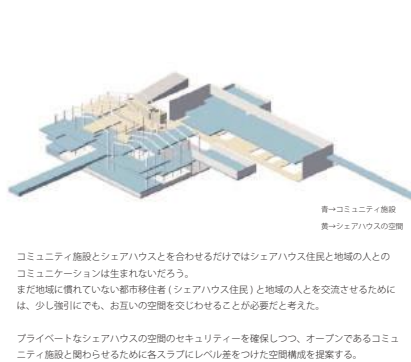
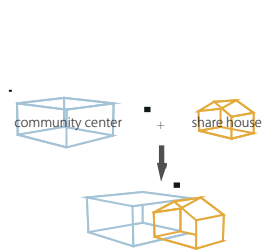
4 敷地

敷地は都心からのアクセスを考慮し、東京から電車もしくは自動車で2時間以内で行くことが可能な地域を選別し、その中から山梨県大月市の工場跡地(写真1)に注目した。敷地周辺には甲斐東部木材団地という地域木材の加工所があり、山梨県の東部の地域木材の加工をここでまかなっている。



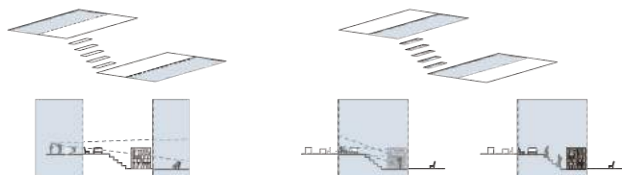
5 空間構成

■ シェアハウスとコミュニティ施設の交わり方
コミュニケーションとはどのようにして生まれるのだろうか。いつ、どのような状況の時に人と人が交流するのか。シェアハウスとコミュニティ施設とを関わらせる手法とはどのような形なのだろうか。



6 家具や光が導くコミュニケーションとは

人は日常生活の中でいつコミュニケーションを取るのか。家族と会話をする時を思い浮かべると、食事をした後、お風呂に入った後、自分の作業をした後に一息を入れるタイミングが多いのではないかと。各スラブが対面する位置に向き合うように家具を配置することで自分の作業に区切りが付いたとき視線が合うことでコミュニケーションが生まれる。



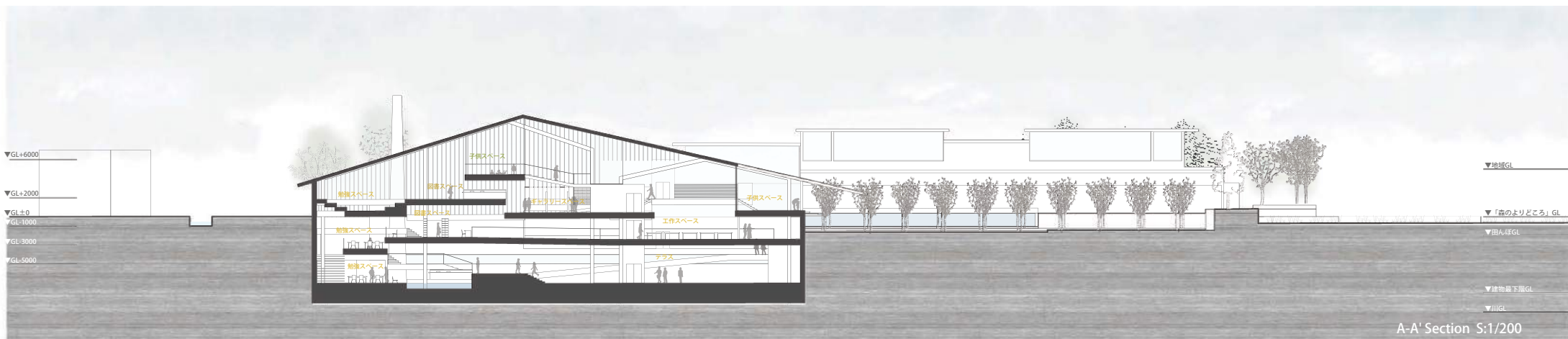
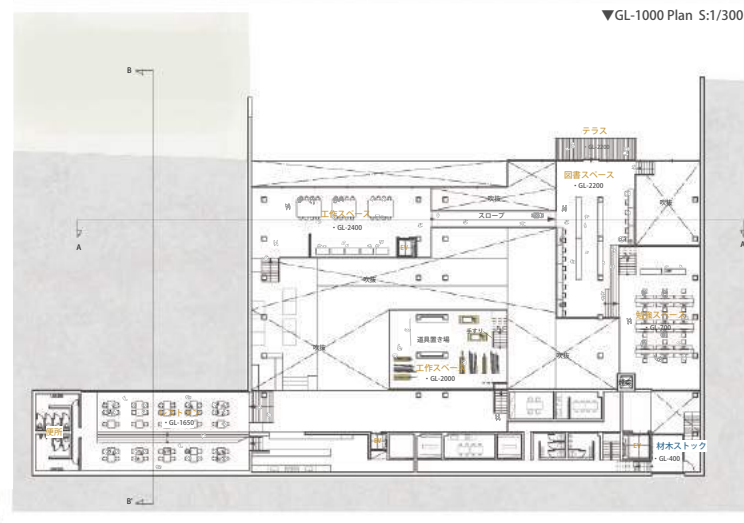
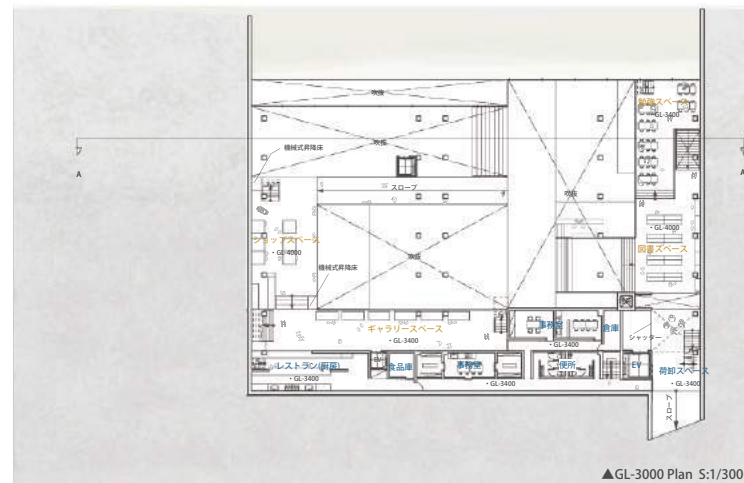
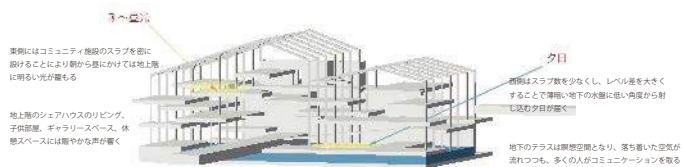
自分の作業をしている時は周りは見えにくい
別の空間の人とのコミュニケーションは生まれない

一息つこうとする時、心に静けさ生まれ
周りが視界に入り相手の存在に気がつく

コミュニティが生まれる

また、明るい空間では賑やかな、静かな空間では落ち着いた、それぞれ違ったコミュニケーションの取り方があるだろう。「光」は人の会話の内容や会話するときの気分を左右する要素のひとつとして考えられる。敷地での太陽高度に合わせて（図8）、トップライトを設け光の量によって部屋の用途を設定することで空間の雰囲気決定する。

建築の空間構成だけでなく、家具の配置やその空間の雰囲気すべてがその場にいる人の気持ちに影響する。



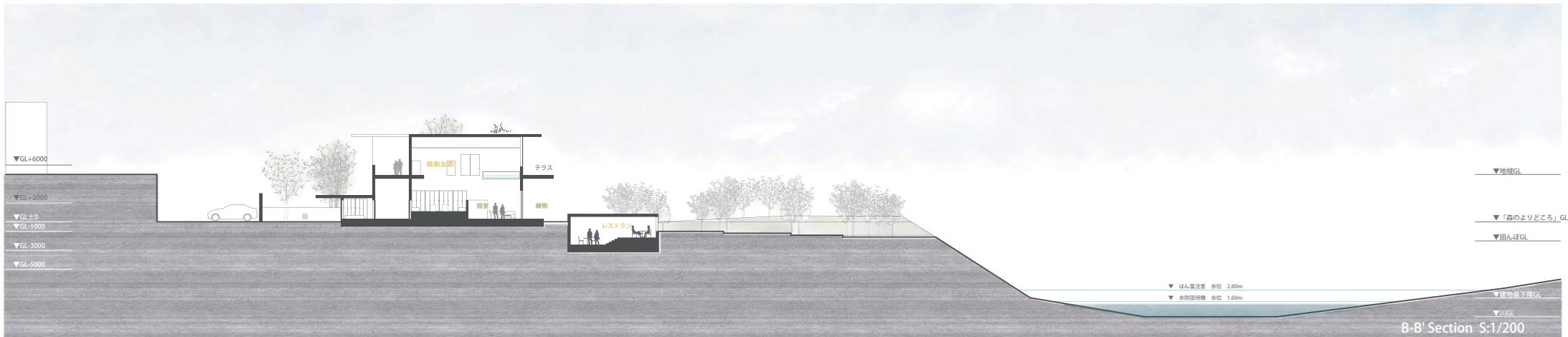
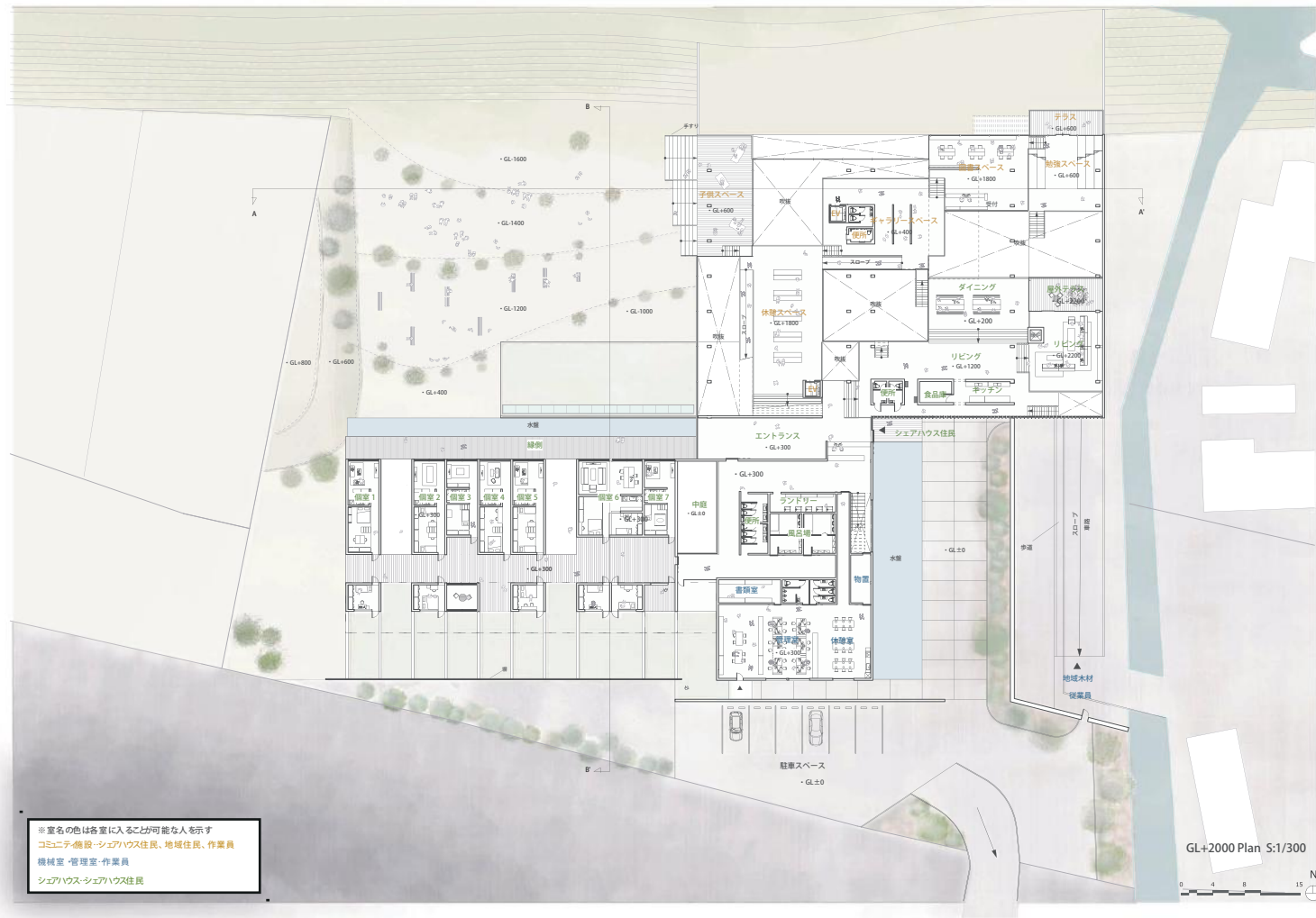
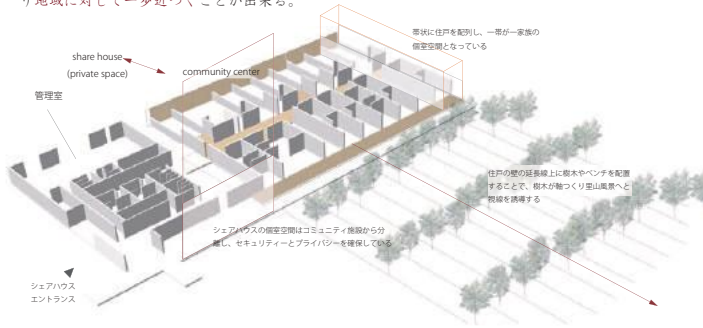
7 里山風景への特等席

都市に住む人が里山に住みたいと思うきっかけは何だろうか。
開けた大地、建物の密度、穏やかに流れる時間、何よりも里山の自然風景を求めて移住したいと思う人は少なくないだろう。

シェアハウスの個室空間では、まず里山地域に住みたいと思わせるために里山の自然風景への眺めを重視して計画した。

短冊状に並ぶ住戸は、部屋ごとにレベル差を設け、どの部屋から入った瞬間に景色がひらける部屋となっている。また、住戸の壁の延長線上に樹木や庭のベンチ等を配置することにより、各住戸に里山風景の特等席が用意される。

この特等席にすわり、まずは3年間生活することで、里山を体験し、豊かさを感じとる事により地域に対して一歩近づけることができる。



B-B' Section S:1/200